

赤坂恒明博士(文学)学位請求論文

## 『ジュチ裔諸政権史の研究』 審査報告要旨

1206年にモンゴル帝国を建設し、チンギス・ハンは、自身の諸子・諸弟に民を分け与えた。長男ジュチは、与えられた民とともに、アルタイ山脈の西麓を遊牧地として、ジュチ・ウルスが成立した。ジュチの跡を継いだ次男バトは東ヨーロッパ遠征を行い、ジュチ・ウルスは、中央アジアから東ヨーロッパにまで及ぶ広大な領域を支配し、モンゴル帝国の西北部を構成した。14世紀前半、ウズベク・ハンの時代にイスラーム化したジュチ・ウルスはモンゴル帝国の崩壊後も、内陸ユーラシア西北部において強勢を保ち続けた。しかし、15世紀以降、いくつかの地方政権に分裂した。本博士学位請求論文は、このようなジュチ・ウルスの歴史を、日本ではじめて本格的に取り上げたものである。

日本のモンゴル帝国史研究は世界の中でも盛んで、高い水準を誇っているが、ジュチ・ウルスの研究については、史料が少ないという制約や、扱うべき史料がペルシャ語をはじめとする諸言語で書かれていることによる困難さによって、空白状況にあった。しかしながらジュチ・ウルスの研究は、モンゴル帝国を理解するために不可欠であるだけでなく、内陸ユーラシアにおけるウズベク族、カザフ族、タタール族などの民族の形成を正しく認識する上でも重要であり、早急に研究を進める必要があった。本論文は、その課題に応えようとしたものである。

本論文は、つぎの章から成る。

### 序章

第1章 ジュチ裔についての系譜資料

第2章 ジュチ裔諸政権の王統と、史料についての諸問題

第3章 成立期～14世紀前半におけるジュチ・ウルス

第4章 14世紀中葉以降のジュチ・ウルス～ジュチ裔諸政権の展開

### 終章

論者はこれらの章において、モンゴル帝国の中でも地域的に広く、時代的に長いジュチ裔諸政権の歴史の「系譜の問題、政権・集団の名称・実態・概念の問題」を扱っている。そ

の場合、従来の諸研究では十分には使用されてこなかったベルシャ語、チャガタイ・トルコ語、アラビア語などの言語で書かれた史料を扱い、しかもそれらの史料やこれまでよく使われてきた史料について、従来の研究に比べてはるかに徹底した史料の分析と批判を行い、ジュチ裔諸政権のこれらの問題に関する従来の研究に数多くの点で変更を迫り、従来の研究を大きく進展させた。

以下に、三つの点について評価したい。

第1に論者は、第1章と第2章において、『集史』、『五族譜』、『ムイッズル・アンサーブ』、『勝利の書なる選ばれたる諸史』に伝えられている系譜情報に関して、諸写本の段階にまで掘り下げた詳細にして徹底した分析を行い、想定される原資料の段階にまで遡って批判・検討することによって、それらの系譜情報を統合・復元することを行い、その成果に基づいて、まずジュチ裔諸政権研究の基礎となる王統の重要な部分について、いくつもの新たな見方を示し、かつ従来不明な点をいくつも解明してジュチ裔諸政権の王統の基本的な流れを跡付けることを可能にした。系譜研究は、論者の最も得意とする分野であるが、まことに見事な分析と論証であると、高く評価することができる。

第2に、論者はジュチ・ウルスの初期の内部構造をだいぶ前に研究し、中央と左右両翼の部分から成っていたとの見解を発表しているが、第3章では、その後の構造の変化を追求して、ジュチ家宗主トクタによってジュチ・ウルスの内部構造が、西部に位置する右翼が中央に併合され再編成された結果、左右両翼から成る構造へ転換したこと、またトクタのつぎにジュチ家宗主となったウズベク・ハンが、それまで独立性の高かった左翼をも自己の統制下に置き、ジュチ・ウルスの統一を事実上成し遂げた経緯を論じてジュチ裔諸政権の歴史が14世紀前半に大きな画期を迎えたとことを、明らかにした。このジュチ・ウルスの内部構造の再編に関する分析からする同ウルスの歴史の転換の指摘は、注目すべきであり、高く評価することができる。

第3に論者は、第4章において、ウズベクという集団について、14世紀後半から16世紀頃にキプチャク草原の東部に「ウズベク」という新しい遊牧民集団——所謂「遊牧ウズベク族」——が形成され、シバン（ジュチの五男）裔のアブール・ハイル・ハンのもとに統一政権「遊牧ウズベク国家」が樹立されたとする通説を批判し、ウズベクの名は、ジュチ家宗主ウズベク・ハンの名に由来し、イスラーム化後のジュチ・ウルスすなわちジュチ裔諸政権を構成する諸集団の総称として、14世紀中葉から16世紀初めに至るまで用いられていたこと、従ってアブール・ハイル・ハンの政権はあくまでも、「ウズベク」の名で呼ば

れたジュチ裔諸政権のうちの一政権と位置づけるべきであると考えられることを論証した。この見解は、かつて一部の研究者が史料抜き、論証抜きで触れたことを、史料に基づいて詳細に分析して導き出したものであり、2000年に学会誌に発表して、高い評価を受けているものである。

論者は、ロシア中心史観に基づいて、ジュチ・ウルスおよびジュチ裔諸政権の西部の動向によって主に構成された「金帳汗国」という政権の枠組が、ジュチ裔諸政権を総合的に理解するための概念として適切であるとは言い難いこと、従ってこの「金帳汗国」という枠組みを解体して、キプチャク草原の東西におけるジュチ裔諸政権の歴史を再構成する必要があると考え、その再構成に努めて来た。本学位論文は、ジュチ裔諸政権支配下のほぼ全域にわたって広く目を配り、以上に評価した王統、構造等の問題の分析によって、ジュチ裔諸政権史の再構成に相当に成功しているものと評価することもできる。

論者は、第3章において、ジュチ・ウルスの左翼を構成していたオルダ・ウルスの立場を検討することを通じて、ジュチ家と元朝のフビライ家との関係を分析し、両者が敵対的であったとする見方を批判した点については、全体としては妥当であると見られるが、部分的には、漢文史料を使つての異論もあり得よう。それにまた、近年ロシア側史料をもっと広く使える状況になってきたとの指摘もあり得よう。

しかしながら、これらのことによって、本学位請求論文の価値が、損ねられるということはない。

以上に述べた審査結果をもって、本博士学位請求論文は博士（文学）の学位を受けるに相応しい研究業績と評価される。

2002年5月28日

主任審査員	早稲田大学	教授	吉田 順一
審査員	早稲田大学	教授	井内 敏夫
審査員	帝京大学	教授	海老澤 哲雄